関連学会印象記

XVIII World Congress of the International Society for Heart Research

永澤悦伸* 橋本敬太郎*

2004年8月7日から8月12日までの日程で，第18回国際心臓研究学会世界会議(XVIII World Congress of the International Society for Heart Research)がオーストラリアのBrisbane Convention & Exhibition Centreにて開催された．3年に一度開催されるこの学会は，世界各地から心臓の研究に携わる研究者が集い，熱い議論が交わされるが，今回も，25を上回る国々から数百名の研究者が参加していた．日本からも，世界的な仕事をされている多くの研究者が参加されていた．

会場となったオーストラリアのブリズベンは，オーストラリアで第3の都市であり，日本からは直行便で約8時間の距離にある．時差も+1時間ということで，時差ぼけの心配がないのは有り難い．今年の日本は例年に類を見ない猛暑に見舞われ，連日35℃以上の真夏日が続いたが，南半球のオーストラリアは気候的には日本と逆であり，真冬であった．しかし，ブリズベンのあるQueenslandクイーンズランド州は，亜熱帯性気候に属するため，朝晩は肌寒いが，日中は20℃近くまで気温が上昇し，ブリズベンRiver沿いにある人工ビーチでは，泳いでいる人も見かけられた．約一週間の滞在であったが，天気は毎日非常に良く，雲一つ見られない快晴が数日間続いた．

学会会場のBrisbane Convention & Exhibition Centreは，ブリズベン市街からは徒歩で20分ぐらい離れた所にあり，周囲にはアミューズメント施設が集まっている．学会参加者の多くは，市街にあるホテルから散策をかねて徒歩で通って来ていた．

*山梨大学大学院医学工学総合研究部薬理学

Congressは，7日に始まり，シンポジウムだけでも48テーマと非常に充実していた．朝は8時からMorning Lectureが始まり，18時までシンポジウムがぎっしり詰まっていた．テーマは，不整脈，心不全といった臨床的な話題から幹細胞や細胞内信号伝達，受容体といった基礎的な内容まで幅広い構成で，先端の研究成果が報告されていた．いくつか，興味深かったテーマを取り上げる．

初日に行われた“Understanding the basic mechanisms for cardiac arrhythmias”では，日本からは，千葉大の中谷先生，福岡大の今永先生，名古屋大の児玉先生も参加されていた．不整脈の研究については，近年，心房細動の基礎と臨床に関心が高まっているが，心室細動も含め，不整脈の発生機序については，未だ未解明な部分も多い．今回，話題として提供されていたNa^+/HCO_3^- co-transporterやKATP channelなどは，近年，新たな治療標的としてその機能解析が待たれており，特にKATP channelの研究は，日本が世界をリードしているといっても過言ではない．今回，中谷先生のグループでは，Kir6.2ノックアウトマウスを用いた虚血再灌流傷害に対するKATP channelの心保護作用の検討を報告されていた．

最終日に行われた“Na^+/H^+ exchange in cardiovascular pathophysiology and therapeutics”では，Na^+/H^+交換系の機能から各心疾患との関連，そして，現在進められている臨床試験の結果まで，幅広く情報提供が行われた．Na^+/H^+交換系は，細胞内pHの調節に関与しており，虚血再灌流傷害との関連が考えられている．Na^+/H^+交換系抑制薬も開発され，動物実験では，心保護作用が示されていた．現在，カリポライドが臨床試験の段階に来ているが，1万人規模で実施されたGUARd During Ische-

Presented by Medical*Online

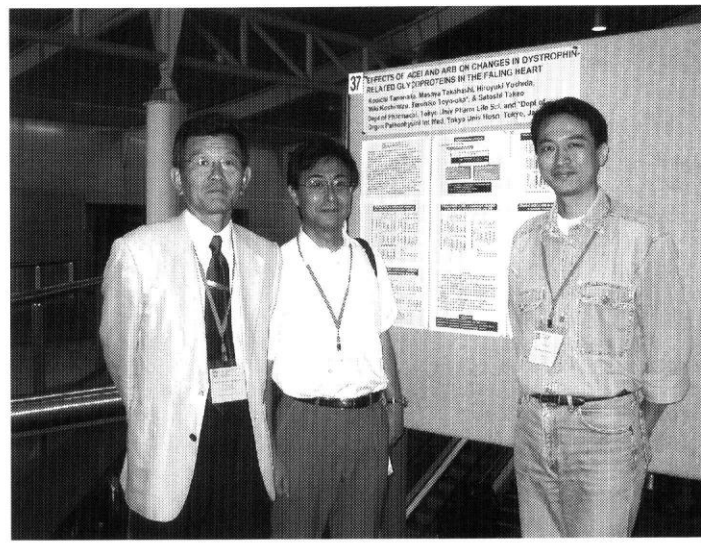

写真1　田野中先生，佐藤先生とともに（左端が橋本）

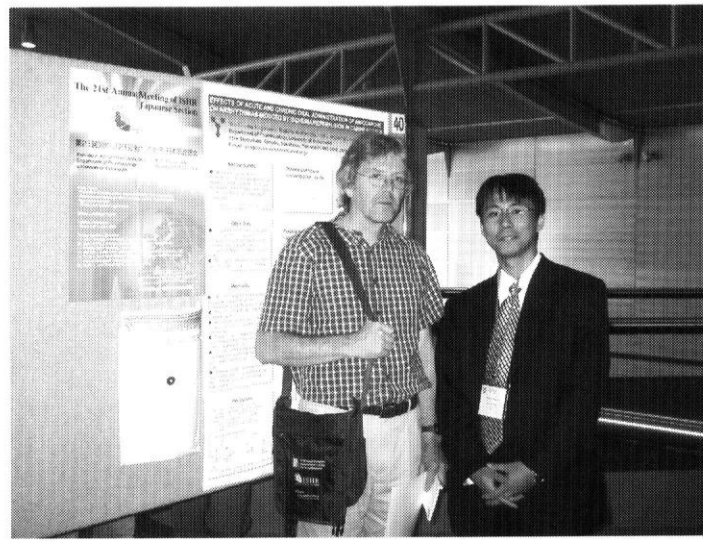

写真2　Dr. Boyett とともに（右が永澤）

mia Against Necrosis（GUARDIAN）trial では，期待された効果は示されなかった（サブグループ解析で，CABG を施行された患者群でのみ，relative risk の減少が示された）．今回，約 5800 人が参加している EXPEDITION trial の結果の一部が示された．最終的な結果は，後の正式な報告を待ちたいが，ポジティブな結果を期待させるものであった．

そのほか，“Wine and the heart” や “Cardioprotective effects of exercise training” など，興味深いテーマも取り上げられており，十分に楽しめる学会であった．

今回，国際学会への参加は初めての経験であったが，全体的に驚かされたのは，ディスカッションの活発さである．日本では，質問や意見を述べるのはいつも決まった人，という寂しい学会も少なくないが，本学会では，かなり若手の研究者から積極的にディスカッションに参加しており，しばしば議論が白熱する場面も見られた．このやりとりに対応できる語学力もさることながら，この積極的な参加姿勢はすぐにでも見習いたいものである．

次回は，2007 年に，イタリアはボローニャで 6 月に開催される予定である．

Presented by Medical*Online